

## “情操教育の季節”への備え

大脳生理学の立場から言えば、情操教育に適した時期は十歳ごろから以後だとされています。数学の岡潔先生が、その著『風蘭』や『月影』（いずれも講談社刊）で、この時期を“情操教育の季節”と呼び、大脳生理学の時実利次先生は、この岡先生の命名を「いみじき表現だ」と評していらっしゃる。

この時期に、書物を通して、人の心の美しさに触れさせ、これを理解させることが、何よりも重要な“情操教育”“道徳教育”であると思われます。

子どもがひとり書物を開き、これに相對する時、書物は親しく子どもに語りかけ、目に見えない栄養分によって子どもの心を育ててくれるのです。

ですから、ほんとうの情操教育が“情操教育の季節”に自然に行なわれる準備としても、その季節以前、つまり幼児期に、読書力の基礎を養っておくことが、その子の一生のために、何にもまして大切になってきます。

書物のことを“本”とは、なんという適切な呼び方だろうと思います。人間を木にたとえ、書物をその根にたとえ、“本”と呼んだのでしょうか。人間は根である書物により成長できるわけです。

書物がわたしたちにとって真に“本”であるためには、それを読む力がなければなりません。その意味では、人間が人間であるためには、読書力がなければならない、と言えます。

したがって、読書力の基礎である漢字力の育成は、その重要性から言っても、またその本質から言っても、何よりも優先しなければならないとすることができます。簡単に「漢字よりも先に教えなければならないことがある」などと言って済ませるべきものではありません。